

課題研究ハンドブック Chapter 5 (試作版)

～フィールドワークについて～

フィールドワークとは何か？

最近、“フィールドワーク”という言葉をよく耳にします。しかし、具体的にはどんなことをするのか？ 高校生の皆さんには、いま一つわかりにくいかもしれません。広辞苑第5版では「野外あるいは実験室での探訪・採集。野外研究。実施調査」と書いてありますが、これだけでは意味が広すぎて、よくわかりませんね。このように、なかなか具体的に定義しにくい言葉なのです。

他者との対話：問いかけとその答えから、自他を理解する

実際、「フィールドワークをどうすすめたら良いか、わからない」、あるいは「リサーチの結果をどうまとめてよいか、わからない」等の質問は珍しくないそうです。佐藤郁哉（2002）の『フィールドワークの技法』をひもとくと、「昔から何度も指摘されているように、フィールドワークについていわゆる「クックブック」風のマニュアルをつくることはほとんど不可能です。というのも、いくつかの定石やルールを杓子定規にあてはめることほど、現地調査がもつ本来の性格から遠いことはないからです」と明記されています。つまり、誰でも使えるマニュアルはない、のです。

それでは、手がかりがまったくないのか、というわけではありません。『フィールドワークの技法』には、フィールドワークには“ストーリー”が必要であること、リサーチでは“問題設定”（取材相手への“問い”）が重要で、その問題に関する“仮説”（仮の答え＝理論や知識をもとにした予想回答）を立て、“相手からの答”（現実の回答）と照らし合わせる。こうした“ちぐはぐ”なやり取りを経て、“ストーリー”が適宜修整され、やがて納得＝あなた自身の結論に達する過程であることが、諄々に説かれています（Chapter 1 も参照）。

つまり、フィールドワークとはクックブックのような教科書を離れ、見知らぬ他者と出会い、とまどいながらも対話することで、相手を理解すると同時にあなた自身も変わっていく過程なのです。

どうしたらフィールドで仮説を立てられるか？

～仮説は一つだけではない～

どうやってフィールドリサーチが始まるか？ アメリカ資本主義社会の小話を一つ紹介しましょう。

靴の会社のセールスマンが途上国に赴く。現地では、みんな裸足で歩いている。A社の社員は即座に本社に「みんな裸足なので、商売にならない」と打電した。一方、B社の社員は「素晴らしいマーケットだ！ みんな裸足だから、全員が靴を買えばすごい売り上げだ」と打電した。どちらが正しい資本主義者か？

まず、セールスマンたちもまたフィールドワーカーであると考えて下さい。そして、「みんな裸足だ」がフィールドリサーチで目にした**事実**であること、そして、「商売にならない／素晴らしいマーケットだ」はその事実に基づいて彼らがたてた**仮説**と考えて下さい。ここで肝心なのは、「みんな裸足だ」という**事実**は**一つ**なのに、そこから**導かれる仮説は複数**である点です。冷静になれば、第3の解釈=仮説も考えることができます。例えば、C社は「巨大なマーケットに育つかもしいないが、現在の経済状況では、彼らに靴を買う余裕がない。マーケットは潜在的なものに過ぎず、将来の可能性を考えてモニタリングを続けるべきだ」と結論するかもしれません。

こうして一つの“事実”から浮かび上がるいくつかの“解釈=仮説”を**仮説群**としましょう。このようにフィールドワークでは、文献や理論をベースにした“仮説”もありますが、眼前の事実に私た

ちが下す解釈、そして“見通し”程度のものも含まれます（佐藤、1992）。

さて、事実に基づいているけれど、互いに相反するこれらの仮説（**代替仮説**と呼ばれます）のどれが正しいのか、あるいはすべて間違いか？ 確認のために現地の人たちにインタビューやアンケート調査で意見をきく。その結果、一つの結論に達する。これがフィールドリサーチの基本型です。

同じものを見ても、見たいものが違えば・・・

それからもう一つ付け加しましょう。増田ほか（2015）は、「**同じものを見ている、見たいものが違えば、見方も変わってくる**」と強調しています。

先ほどの小話に戻れば、靴のセールスマンは“**裸足**”に眼をやりますが、衣装の研究者なら、彼らがまとっている**衣類**やその**素材**、**デザイン**に注目するでしょう。建築家ならば、人々よりも、背後の**建物**や**まちの様子**が気になるかもしれません。

つまり、隣の人はあなたと同じものを見ていたとしても、見たいものが違えば、異なる景色が見えてくるのです。そのためにも、Chapter 2で紹介したKJ法などが用いられているのです。

ゲーテ、フィールドワーカーとしての理想像？

それでは、フィールドワーカーとしてどんな姿勢で臨むのが良いのでしょうか？ 18～19世紀のドイツの文豪で、自然科学にも関心が高かったゲーテは、20ヵ月にもわたるイタリアへの旅行を記録した『イタリア紀行』で、ローマへの途次にあるポーツェンの町で以下のように書きつけます。

ポーツェンの歳の市では絹物の売行がよく、羅紗類も市に出される。（略）私はここで全部まとめて見られる産物をすっかり調べてみたくてならなかったが、（略）統計ばやりの当今では、（略）ものの本によって調べることもできると思えば、気が休まるというものだ。しかし、現在の私としては、本でも絵でも与えてくれない感覚的印象が大事なのだ。肝要なことは（略）自分の観察力を試験し、自分の学問や知識がどの程度のものであるか、自分の眼が明澄純粹であるのか、どのくらいのことを自分は束の間につかみうるか、自分の身上に刻印されたしわを元通り消し去りうるか否かを吟味することである（ゲーテ、1960；一部省略）。

この一節こそ、フィールドワーカーがとるべき姿勢をもっともよく表したのものかもしれません。なじみのない土地に行き、見知らぬものを見て、自らの観察力と感性を確かめ、自らの先入観を消し去る。こうした姿勢は、高校や大学を卒業して社会で働く時にこそ、重要なものになるはずです。

フィールドとは何処か？ ～見るものすべてがフィールド！～

さて、フィールドとはどこでしょうか？ 実は、あなたの眼にはいるものすべてがフィールドかもしれません。例えば、高校への通学途中、駅や電車で無数の**広告**を見るはずです。さらに、本来は広告が飾られるべき場所なのに、広告がなく、枠だけがあることに気付いたりします。

どんな広告があるでしょう？ 例えば、ある駅には病院と塾・予備校の広告がたくさんあります。そこはニュータウンかもしれません。また、別の駅では広告が飾っていない枠だけが並んでいる、それは不景気のバロメーターかもしれません。あるいは、京都線や神戸線等の一つの路線で各駅、あるいは各電車内にどんな広告が掲示されているか、比較するのも興味深いかもしれません。かつて早稲田大学教授だった今和次郎は“考古学”をもじった“考現学”を主唱、街をいく人たちの衣装や髪型、履物、帽子等々、様々な社会風俗を組織的に調査しましたが、これも立派なフィールドワークです。

その一方で、事前にきちんと調査計画をたて、文献調査もおこなうことも重要です。そして、フィールドにでかけて、インタビュー／ヒアリング（Chapter 4）やアンケート調査（Chapter 5）を実施、そこに公刊データ（Chapter 4）もまじえて、レポートのアウトラインを整えていきます。その上で、もっと重要なことは、フィールドでリサーチの対象とされた方々との“対話”がなりたっているかどうか、にほかなりません。

フィールドワークの“レシピ”

クックブックのようなものは存在しないと言っておきながら、高校生の方にはやはりレシピが必要でしょう。表1は、リサーチでの手順について佐藤（2002）による表を改編したものです。

表1. リサーチの段階にそった問い、答え、レポート作成の対応関係（佐藤、2002の表6・1Aを改編）

段階	問い（問題設定）	データ収集・分析	仮説の段階	レポート
計画・予備	初めの問題関心	探索的な収集・分析	予想・見通し	大まかで仮のアウトライン
中間	リサーチクエスチョン作成	焦点を絞って収集・分析	仮説群	アウトラインの改訂
最終	最終的な問題設定	補足的な収集・分析	結論群	アウトライン確定・完成

Chapter 2を振り返ると、「**テーマを絞る**」という作業はこの「問い（問題設定）」の列に該当するかもしれません。初めに抱いていた関心は、事実を知るにつれて具体的なリサーチクエスチョンに変わり、最終的に「問題意識」として絞られます。（現場を知らない段階での）予想は（現場を知った上での）作業仮説群となり、最終的に結論群に絞られます。これがChapter 2の「**アウトラインを考える**」につながり、やがてレポートのアウトラインに結晶していくのが一つの理想かもしれません。

それでは、この表を参照にしながら、以下、まとめていきたいと思います。

（1）リサーチ・デザインを考える

- ①表1では計画・予備段階です。初めの問題関心に基づき、テーマの素案を考え、ふさわしいフィールド・研究対象の人々などを想定します。同時に、指導の先生からアドバイスをいただいたり、文献を紹介してもらいます。データ収集としては手探りに近い“探索”的な収集・分析になります。
- ②次に、アドバイスや文献サーベイから、予想・見通しをたてます。レポートならば、大まかな仮のアウトラインになります。この際にも先生方からのアドバイスをいただきましょう。
- ③とくに**予備調査**を実施、その際にインタビュー・ヒアリングする場合は、テーマの素案にあわせて、入念に質問を準備して下さい。予想もしない回答が返ってきて、とまどうこともしばしばです。

（2）予備調査

- ④予備調査実施：理想的なフィールドワークは (i) 予備調査、(ii) 本調査、(iii) 補足（再）調査の3段階からなります。もし余裕があれば、ぜひ予備調査を実施して下さい。
- ⑤予備調査での観察のまとめ：観察結果や見通しをまとめるのに役立つのが、Chapter 2の5頁で紹介した**KJ法**です。一人で調査した場合でも、自分の観察結果の整理に、そして複数メンバーによる予備調査では全体像を把握し、本調査に備えるために、活用して下さい。

（3）本調査

- ⑥本調査の準備：予備調査を受けて、本調査のリサーチ・デザインをあらためて考えます。とくに、浮かび上がった仮説群を意識して、リサーチの焦点を絞ります。
- ⑦**本調査**：本番です。予備調査で浮かび上がった見通しにもとづき、焦点を絞ってデータを収集・分析します。量的データの場合は、統計による分析がよく使われます。
- ⑧本調査をまとめます。仮説群はデータによって検討され、調査の結論が見えてきます。レポートのアウトラインもおのずから整ってくるはずで。

（4）補足（再）調査

- ⑨余裕があれば、ぜひ**補足調査**をして下さい。⑧の本調査のまとめで新たな疑問が出ることや、資料の不足を感じることも珍しくありません。また、再調査では本調査と異なる結果になることもあります。そんな場合でも慌てず、異なる結果が出た理由を考えれば、また別の世界が分かってきます。

⑩**文献調査**も再度必要になってくる場合もあります。すなわち、フィールドの過去にも眼を向けなければいけなくなった場合です。ここまで説明してきたフィールドワークは、ある意味、“現在”を切り取る作業と言えるでしょう。その一方で、その“現在”は“過去”を経ているわけです。さらに“未来”にもつなげるためには、そこまで見通した文献・資料があるかも気になってくるのです。

(5) 定点観察

定点観察とは、同じ場所(定点)から対象を継続的に観察することで、時間的な経緯を踏まえて、過去との差異を分析することです。この方法によって、それまで見逃してきた巨視的な変化を抑えることができます。例えば、毎年、同じ場所を同じ視点ですっと記録をとっていく。そうすると、短期的な視点では見落としていた色々な変化が見えてくるのです。

例えば、商店街の変遷、ニュータウンの高齢化、微環境の変化等は、1年かぎりのリサーチではわからず、高校等では先輩から後輩へ、年度を越えて観察を継続していくことで明らかになります。

究極のフィールドワーク：参与観察の例

最後に、現地の人たちの生活に溶け込む参与観察＝フィールド調査について、20世紀最大の人類学者の一人、C・レヴィ＝ストロースの『悲しき南回帰線』を少し紹介しましょう。彼は1934年のパリで「ブラジルでの民族学調査」への参加を持ちかけられます。しかし、現地で直面したのは、先住民に会いたければさらに南米の奥深く、僻地“ロンドニア”に出かけねばならないという事実でした。故国フランスから地球を半周ほども旅した荒野で、彼は裸で生活するナムピクワラの人たちについて、こう書き記します。

「生活の無一物状態はほとんど信じがたいほどだった。男女ともに一物も身にまとっていない」「夜明けとともに起きて、火をもやし、何はともあれ夜なかの寒さに冷えた体を暖め、それから前夜の残り物で軽く食事をする」「(一日の終わりに)明るく輝きはじめたなつかしい火のまわりに、家族の集まりができる。夕べの集まりは、話や歌や踊りのうちにすぎていく。ときには、これらの楽しみが夜遅くまでつづくことがあるが、たいていはすこしばかり痴話げんかや友だち同士の争いがあつたあとで、夫婦はしっかりと抱き合い、母親たちは眠っている子を抱きしめ、あたりは静寂に還り、寒い夜はタキギのはぜる音と、タキギをくべる者の足音と、犬の吠え声、子供の泣き声に、ときおり生気をとりもどすだけだ」

このフィールドワークは10年の熟成を経て構造主義¹人類学の幕開けとなる『親族の基本構造』に、さらに6年を経て畢生の傑作『悲しき南回帰線』に結実します。そのレヴィ＝ストロース自身は、18世紀の思想家J・J・ルソーこそ「自分以外の人間を知ることにより自分を知らうとした最初の人間である」＝人類学の始祖と称えています。このように“自己”と“他者”を比べるうちに“自己”を理解する業こそがフィールドワークの神髄なのです。

引用文献

増田研・梶丸岳・椎野若菜編(2015)『フィールドの見方』古今書院。

新村出編(1998)『広辞苑第5版』岩波書店。

佐藤郁哉(1992)『フィールドワーク』新曜社。

佐藤郁哉(2002)『フィールドワークの技法：問いを育てる、仮説をきたえる』新曜社。

2016年12月

編集：関西学院大学総合政策学部・関西学院千里国際高等部

¹ 構造主義：人々が明確に自覚していないけれども、社会や文化の根底にあつて様々な現象を引き起こす“構造／システム”を分析することで、社会現象や文化現象を理解しようとする分析方法です。